

地域の悩みを分かち合う、 令和の“お節介長屋” ——泉尾地域拠点「ヨリドコ大正るつぽん」

インタビュー

細川裕之

「オルガワークス株式会社専務取締役」

大谷みさ子「取材・執筆」

古里麻衣「撮影」



不動産物件に関し、もっぱら性能や利便性、資産価値が重視される現代。しかし、私たちの日々の暮らしを振り返ったとき、本当に大切なものは別のところにあるのでは、との思いもよぎる。大阪市大正区泉尾地区にある「ヨリドコ大正るつぽん」は、訪れる人々にそうした問いを投げかける場だ。築70年の長屋を再生し、カフェや福祉事業所、地域活動の場として多様な人々が行き交い、悩みを打ち明け、これまでになかった支援する／される関係を築く取り組みは、単なる空き家活用や地域活性化という言葉では語り尽くせない。同物件を所有・管理、先進的な試みの中心人物でもあるオルガワークス株式会社専務取締役の細川裕之氏にお話を伺った。

「ヨリドコ大正るつぽん（以下るつぽん）」の出发点は、地域に残されていた古い文化住宅——南北に2棟が並ぶ双子長屋「小川文化」と、長屋の3代目オーナーでありオルガワークス株式会社代表取締役の小川拓史氏の「再会」からだった。

「2017年11月に、北棟の『ヨリドコ大正メイキン（以下メイキン）』が出来上がりました。もともと『メイキン』の方は劣化も進み、長く空き家でしたので、最初はこれをどう活用するかという話から始まったんです」

2019年11月発行の本誌123号「地域と時間をつなぐ——「よそ者」の役割とは」でも

大型台風21号の被害にまわれたことで、転機が訪れる。補修を重ねたトタン屋根は吹き飛び、雨漏りもひどくなり、住み続けることが困難になってしまったのだ。住民たちは、やむを得ず転居を選択した。

古い物件を再生活活用することで、 地域の記憶と文化を受け継いでいく

「皆さんと一緒にこの古い建物も最期を迎え、役割を終えるものと思っていたら、空き家になったことで、突然『どうしますか?』と選択肢が与えられたわけです」

古い建物を再生するか、それとも取り壊して新しい建物を建てるのか。いわゆる「空き家再生」の現場では常に問われる問題である。しかし細川氏は、器としての建物のみに終始する議論に違和感を覚えていた。



上／双子長屋の北棟（写真右）が「ヨリドコ大正メイキン」として再生された2017年当時の小川文化。現在「るつぽん」となっている南棟（写真左）は手つかずのまま。
中／2018年の台風21号により、居住困難な状態に。
下／地域の記憶を積み重ねる場所として残すため、建て替えることなくリノベーションが行われた。
写真提供／オルガワークス

「当初、ここもリノベーションの提案を依頼すると、更地にして駐車場やマンションにしようとか、利回りの提案しか来なかった。確かに、築70年を経たうえに地震と台風によられた建物は、かろうじて柱や梁が使える程度で、再生には『メイキン』以上に資金と手間がかかります。でも、それで潰した瞬間、この場所のことは近隣の皆さんの記憶から失われ、このあたりで暮らした数百、数千の方々の暮らしの記憶もすべて消えてしまう。それは、この地域にとって大きな「損失」になると思ったんです」

文化住宅という呼称には、戦後日本、特に大阪の住宅史そのものが凝縮されている。高度経済成長期、多くの人々が地方から都市へ移り住み、この限られた空間の中で日々の暮らしを築いた。狭いながらも、人々はそこで家族を育て、地域とのつながりを育んできた。

「ここに住んでいた○○さん元気かな、とか、昔ここで遊んでたな、とか。そういうことを思い出せる場所って大切だと思うんです。きちんと耐震をしてリノベーションして、僕らがそのリスクを取って担保していくことで、この泉尾に住んでいる人たちが昔に立ち返れるような、記憶がちゃんと積み重ねられる場所になる。そうあり続けることが大事なんじゃないか、と考えました」

細川氏は、建物は「ただの箱」ではなく、記憶の蓄積により独自の味わいがにじみ出てくる「有機体」とも表現する。古い建物を残すこと



左上／2023年6月に本格オープンした「ヨリドコ大正つぼん」。右上／1階正面のおばんざいカフェ「まにまに」。左下／「ちゃんと美味しいグルテンフリースイーツ」として人気の「アトミヨソワカ」の商品は、同じく「るつぼん」のテナントである就労継続支援B型事業所「ろくえもん」でつくられたもの。右下／「入りたい人に『どうぞどうぞ!』ではない(笑)」というテナントには、新たな“仲間”を待つスペースも。撮影／古里麻衣

は単なるノスタルジーではなく、地域の記憶を受け継ぎ、そこに培われた「生活文化」を未来へ受け渡す行為となり得るのだ。

人は美味しいご飯を目指して集まり、そこから悩みを打ち明けるようになる

「るつぼん」に先行する形で、その立ち上げに大きな影響を与えた経験がある。それは小川氏と細川氏が中心で運営していた、飲食の場だ。『メイキン』が出来上がった後、次に何をやるにしても「食」というテーマが絶対出てくるという想いがありました。それにはまず、自分たちがノウハウを持たないといけないと思った

という疑問が今まで以上に浮かぶようになったという。

社会は人をカテゴリーに分けたがる。高齢者、障がい者、子ども、生活困窮者など、いずれも制度を運営するためには必要な分類だ。しかし現実には、どのカテゴリーにも当てはまらない困りごとを抱えた人がたくさんいる。孤独であること、話し相手がいないこと、居場所がないこと……それらは制度では対処できないけれど、暮らしに深く関わる問題であり、見逃せないものばかりだ。

「福祉の『場』は漂っているような状態が良く、それを見て悩みを抱えた人が『ここだったら、話してみてもいいかも』と気軽に思える。そんな連鎖反応が起こりやすい状況をつくることが、大事だと考えました。食で寄って来る場所に、さらに人が集まって来るみたいな状況をつくり続けることができれば、それが『新しい福祉』につながるんじゃないかと。それはたぶん、いま国も推奨する『相互扶助』や『共助』に近い関係ということになるのだと思います」

そう語る細川氏の想いは決して独りよがりではなく、氏自身が「20〜30年後ぐらい、ちょっと先の未来からいまを見る視点」という、ユニークながら明確なビジョンに基づいたもの。事実、「TENCHOS」は2022年に閉店するが、そこで得たアイデアと育まれた人間関係は「るつぼん」で大きく開花していった。

わけです」と細川氏。順調に滑り出していた「メイキン」も「モノをつくる人同士はつながりはじめていたけれど、それが地域にまでは広がっていない。もっと地域の日常に必要なものにしなければ」という気持ちもあり、2019年4月、大阪市北区兎^と我^が野^の町^{まち}にダイニングBarの「TENCHOS（テンチョス）」をオープンする。最寄り駅から10分以上の古い雑居ビル内にあり、ふらりと立ち寄れる場所でもない。加えて、2020年4月からはコロナ禍で緊急事態となったにもかかわらず、客同士のつながりから、ソーシャルディスタンスをとって多くの人が集まった。そこでふたりが気づいたのは——人は「支援を受けるため」には集まらないが、「美味しいご飯を食べるため」なら自然に集まるという事実だ。「それまでにも、いろいろなコミュニティづくりをしてきましたが、『何か困ってる人来てください』とか、『このことについて知りたい人来てください』っていうだけでは、人はなかなか集まらないんです。そこには、自分が困っていると、か、助けて欲しいと思われるのが嫌だからという理由もあるんじゃないか？ ならば、

集まる誰もが「支援する／される」お節介りの循環のハブとして

「福祉×アート×小商い」をコンセプトに掲げる「るつぼん」が本格オープンしたのは2023年6月。建物正面にお店を構えるおばんざいカフェ「まにまに」やグルテンフリースイーツの店「アトミヨソワカ」、中庭に面した和紅茶カフェ「つむぎ庵」などの小商いが盛況という。

取材当日も店内はもちろん、路上のベンチでは孫を連れなおじいちゃんがカフェの手作りコロッケを頬張り、中庭ではご近所さんの女性同士がお茶しながら楽しく会話するなど、美味しい「食」とともにゆったりくつろぐ姿が見られた。概して滞在時間が長いのは、この建物や場所、そして「TENCHOS」の縁から入居したテナントも多いという人間関係が生む、適度に「濃い」居心地の良さもあってのことだろう。おばんざいカフェのオーナーが隣接する高校の生徒から人生相談を受ける場面など、ここに来なければなかなか見られない。

一方、建物内にはそれらと重なり合うように、福祉施設や関連活動を支援する場も設けられている。「アトミヨソワカ」のスイーツの製造を担う就労継続支援B型事業所「ろくえもん」（建物内1〜2階に入居）は、もともと重度障がい者のデイサービス事業などを行う「ナショナルサイアーケアネット」（同1階に入居）が運営

何か違う目的で来てもらい、それと一緒に心の解決したい問題も持ち寄れる。そんなタマエミみたいなものをつくってあげる必要があると思います、それには食が一番の入り口になると感じました」

確かに、食には不思議な力がある。同じテーブルを囲んで食べると初対面でも緊張がほぐれるし、沈黙も苦にならず、やがて自然に会話が交わされていく。そして会話を通じ、人は少しずつ自分のことを話し始める——コロナ禍でのこうした気づきは、やがて「新しい福祉」という新たな方向へとつながっていった。

制度のカテゴリーから漏れ落ちる普通の人々のための、新しい福祉

「当時の『TENCHOS』には行政職員、教員、介護職、医療関係者、弁護士など、いわゆる社会を支える立場にある人たちが多く通ってきました。彼らがやがて、職場では言えない、家族にも話せない、友達にも頼れない、そんな悩みを僕らの店で打ち明けるようになったんです」ふだん支援する側の人たちも、実は支援を必要としている、そのことに細川氏はシンプルに驚いたという。ほかに、店にはコロナ禍でアルバイトを失った学生など、さまざまな問題を抱えた人たちがやって来た。

「まさに普通の人たちです。でも、その普通の人たちにとって相談する場所がなかった」と話す細川氏の頭には、「普通ってなんやねん？」

している。代表はやはり小川氏や細川氏と知り合ったうえで、この場所をひと目で気に入る、階段などの設備面で重度障がい者用に不向きな建物に合わせ、わざわざ新事業を立ち上げたという。

細川氏は福祉現場での分類によって、個の可能性が狭められることを危惧し「ラベリングはその人にとって重要ではないもの。福祉はできる限り個別化していくべき」と話す。実際、「るつぼん」の周囲には長年福祉の現場で働いてきたものの、体力的に従来の仕事は続けにくくなった人たちもいて、将来的に新たな形で働く場になることも想定している。「固定しないことが大事」と話す細川氏の言葉どおり、そこでは「支援する／される」の境界が少しずつ曖昧となり、誰かが助けられる側であると同時に、別の場面では助ける側にもなり得るだろう。そうした相互の「お節介り」の循環と広がりへ向け、「るつぼん」には地域のハブの役割が期待されているのだ。

真に助け合える関係を育てるために必要な「自己を開く」環境づくり

「高齢者だから座っていてください、障がい者だからサービスを受けてください、といった押し付けは乱暴だと思います。僕らが投げかけるのは『あなたは何をやりたい？ それをもっと大事にして、ここで出したいんですよ』ということなんです」



上／「るつぽん」で定期開催の「大正ヨリドコマルシェ」には、飲食や服飾、各種体験、整体、短歌教室までノンジャンルのにぎわいを見せる。中／「メイキン」との間の中庭は、地域の人々がふらりと立ち寄るくつろぎと語らいの場に。下／誰でも自己開示できる機会をと「るつぽん」の共用スペースで開かれる「地域の総合福祉相談・ミナの語り場」。写真提供／オルガワークス

そうした細川氏の言葉の背景には、「自己開示」が足りない社会への懸念がある。

「いま、私たちに一番不足しているのは、自分の生活のなかでの自己開示の時間や場所です」と話す細川氏はまた、多くの人が自分は本音で話していると思いつつ、実際はどこかに扉をくくって閉じているとも指摘する。

「突き詰めて話していくと、『ここは開けていない』という扉に自分で気づくんです。それを開けないと次に進めない。開いていないのに開いている気になっている状態が、『一番怖い』

なぜ、それが問題なのか。」「人間関係のトラブルって、結局は不安感のぶつかり合いじゃないでしょうか。本当の不安を言語化できないまま、タテマエ同士で喧嘩して

いるから答えが見えない。昔の長屋では、異なる家族がひとつ屋根の下に住んで『私はここが不安』『ウチはこれに困っている』とぶつけ合っていましたよね。だからこそ、時に喧嘩もしながら互いにお節介を焼き、最終的に助け合えていたんじゃないかと思うんです」

もちろん、現代人がすぐ同じようになれるわけではない。実際、「るつぽん」で定期的に行われる「大正ヨリドコマルシェ」や「地域の総合福祉相談・ミナの語り場」でも、初回から積極的に話す人は少ないという。

「最初は『私はちょっと……』と尻込みしていた人が、4〜5回来るうちに少しずつ話しはじめて積極的になり、急に輝き出す。安心して自発的になれる場所があると、人って変わるんですよ」

がしたので『ごめんなさい、僕は無理です』と辞退しました」

補助金の申請を通じて自らのビジョンが明確になるとともに、居住福祉・地域社会学が専門の大阪公立大学大学院・野村恭代教授と知己を得るなど、現在の活動につながる面も多かったと振り返る細川氏。会社の利益や社会的な正しさを並べ立てる前に、自分の本音を隠さない、そんな氏の「自己開示」の姿勢は、現在の「るつぽん」のそこそこにも見ることができ

る。「当初の予算になかったバルコニーは、中庭の緑と隣に立つ神社の御神木を眺められる場所が必要と感じ、無理を言って設置しました。みんなが集まる2階の共同リビングにカーテンをつけていないのも、建物の外とのつながりを大事にし、また視線を遮らない開放感が新たな創意にもつながるという判断からです」

振り返れば、新しい文化や価値観は往々にして偶然や混沌から生まれてきた。計画通りではない出会い、失敗や誤解、自分だけのこだわり、そして日々のおしゃべりや思いつき――そうした「ノイズ」が次の時代へのきっかけになるとの信念から、「るつぽん」はテナントに対して必要以上に管理しないのだという。「メイキン」と「るつぽん」の関係性についても「全然違う分野の人と日常会話ができるって、すごく重要」といい、「るつぽん」の設えや宣伝物を「メイキン」のクリエイターたちがサポートしたり、双方のコラボイベントを実施したりと

いった交流が積極的に行われている。

「テナントと僕たち、テナントとお客さん、そしてテナント同士、さまざまながら偶然変異が起こり得る状態をつくり、そこに生まれるものを大切にしたいんです」

そうした想いは異なるプレーヤーとの協働にも及び、大正区の各種行政窓口、学校やさまざまな地域団体、さらには前述の野村教授の研究室も含めた産官学民連携も実現。より広く大きな枠組みを通じて、地域における行き場のないさまざまな相談ごとの吸い上げⅡアウトリーチも図られている。

関係性のインフラとしての不動産が物語の積層Ⅱ生活文化を紡いでゆく

インタビューの終わり、細川氏は次のように語ってくれた。

「僕自身の肉体とか精神の延長が、この施設みたいな感覚があるんです。建築と人間の精神や哲学が一体になって動き出すと、関われる人の数も、提供できるものも、何倍にも拡張されていくんじゃないでしょうか」

この言葉は、住まいを単なる建築物ではなく、「関係を拡張する装置」として捉えていることを示している。築70年の文化住宅を耐震改修して残すこと、食を入りに人を集めること、肩書はらずして語れる場をつくること、ラベルより個人を優先すること、偶然や混沌を排除しないこと……一見バラバラにも思えるが、実はひ

その変化を生む条件として、細川氏は「肩書をはずして話せる場」の重要性を挙げる。

「自分の所属や役職を脱ぎ捨てた、『ひとりの人間』として喋れる場がすごく大事なんです」「るつぽん」が提供しているのは、単なる場やイベントにとどまらず、まさにそうした「自らを開く練習」のできる環境なのだろう。

「テナントにしても、入りたい人には『どうぞどうぞ!』ではなく、コミュニケーション力の有無、それも表面的でないものを期待しますし、施設や運営に関する不満についても『まずは皆さんで話し合って』と放置するんですから、変わった大家さんですよ(笑)」

あえて「ノイズ」を生み出すことが、次の時代へのきっかけとなる

「るつぽん」の成り立ちを語るうえで象徴的なのが、国からの補助金をめぐるエピソードだ。一般に、空き家再生や地域活動では、行政補助が重要な財源になる。しかし細川氏は申請が通ったにもかかわらず、これを途中で辞退。本人は「理由は簡単なんです。自分の心がざわざわして嫌だと思ったから」とのことで、条件が悪かったとか、制度に反対だったという話ではまったくくないという。

「ただ、リスクを排除して安定を求めがちな行政側と、常に変化していきたい我々にはどうしてもズレがある。このお金をもらったら、自分はずっとモヤモヤした気分ですることになる気

とつの思想でつながっている。それは、「生活文化は、人と人との関係性の積み重ねによって生まれる」という考え方だ。

住まいについて考えるとき、私たちは交通・アクセスや買い物環境、教育・子育て環境、治安などに目を向ける。しかし、暮らしを豊かにするものはそれだけではない。安心して自己開示できる場があるか、困ったときに声をかけられる相手がいるか、誰かの役に立てる感覚をもてるか、記憶を共有できる場所が残っているか。「るつぽん」の実践は、そうした「関係性のインフラ」をどう都市に埋め込むかという挑戦でもある。

住まいとは建物ではなく、暮らしの舞台である。そして生活文化とは、その舞台の上で人々が紡いできた物語の積層なのだ。その名の通り、多様なものが混ざり合う「増埒」として、一人ひとりが点として出会い、つながり、集まって、面としての地域に新たな生活文化の種を蒔いていく。そんな力強い営みが、今日も大阪の一角で静かに動き続けている。



細川裕之（ほそかわ ひろゆき）
オルガワークス株式会社専務取締役。2013年、個人デザイン事務所「EINOS DESIGN」を立ち上げて独立。その後、同社役員を兼任。「コト・場・ヒト」に関心をもち、シェアオフィス「ヨリドコワークス」や、シェアアトリエ「ヨリドコ大正メイキン」の企画運営を手掛けるようになる。クリエイターをサポートする、ビジネスカウンセリングやイベントプロデュースのほか、地域再生につながる教育やまちづくりへの関わりも広がっている。